

# 焼津がにおんがえの恩返しへび(新説・蛇むこいり)

再話・絵 山田辰美

青く青く、果てしない海。

緑深く、空に向かう山。

その間に僕らのふるさとがある。

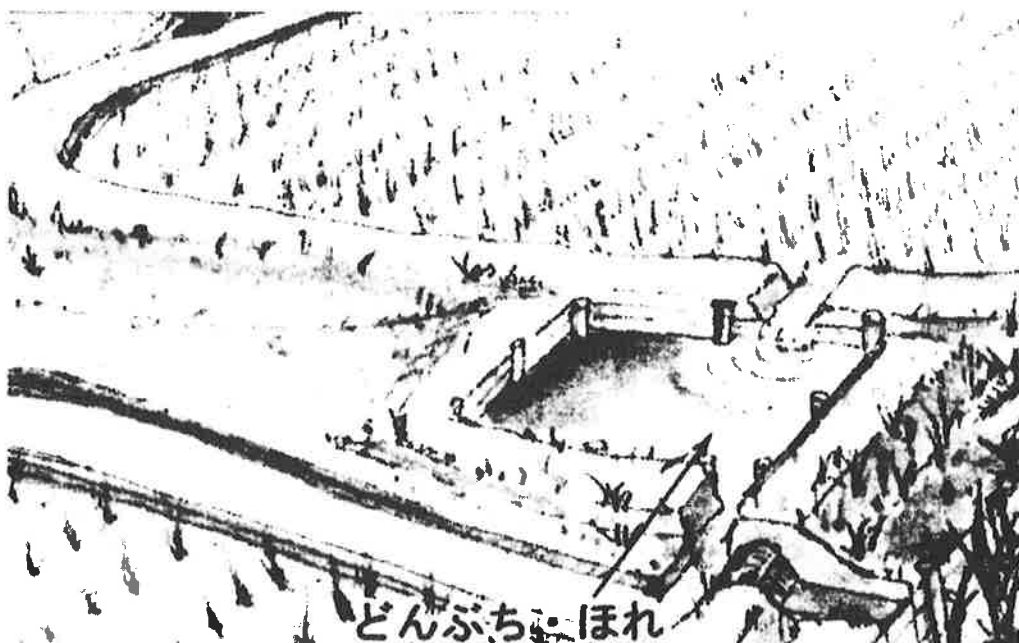


今日はカニのお話し。山で暮らすカニ、  
河口のあしはら芦原にいるカニ、それから海と山を  
行き来するカニ。瀬戸川にはいろんなカニ  
が暮らしているんだ。河口に近い野山にだ  
け見られるハサミの赤いカニを見たことが  
あるかい。焼津ガニと呼ばれるカニだよ。  
普段は海を見下ろす山や土手に穴を掘って  
住んでいるけど、一年に一度卵を産む時に  
は、1キロ以上も離れた浜や河口までたく  
さんのカニがいっせい一斉に歩き下るそうさ。ハサ  
ミだけがあざ鮮やかに赤くてよく目立つ。実は、  
このカニはとてもおくびょうもの臆病者だったんだ。

その昔、ヤマトタケルノミコトを殺そうと、悪者たちが焼津の原っぱに火を放ったのだ。焼津ガニはヤマトタケルノミコトのために何もできず、怖じけづいて穴に隠れてぶるぶるふるえていただけだった。その時、頭をおおっていたハサミが土から出ていたために、炎に焼かれて赤くなったと言われている。

そして今日はもう一つの焼津ガニの伝説。

昔は瀬戸川せとがわの土手から高草山たかくさやまの麓ふもとまで、田んぼが幾重いくえにも広がり、その間を小川が流れていた。この辺りの田んぼでは昔から、美味しいことひょうばんで評判のお米がたくさんとれたんだ。10年に一度位の割で



洪水にみまわれたが、そのお陰でまた豊かにお米がみのるのだそうだ。田んぼを潤うるおしている水は、瀬戸川せとがわから小さな小川を通して運ばれている。けれども、雨の降らない日が1カ月も続くと、瀬戸川せとがわの流れはチョロチョロと細くなってしまい、やがてすっかり涸かれてしまうのだ。そのため瀬戸川せとがわは、しょんべん川とか、一時川いっときがわと呼ばれていたんだよ。

田起こしが終わって水を張って間もないのに、  
米作りの上手なじいさまの田んぼも、とうとう干<sup>ひ</sup>あ<sup>あ</sup>がってしまった。

「田植えの時期なのに、水がない。困った困った。」

と頭<sup>かか</sup>を抱えるばかりだった。

じいさまは、高<sup>たかくさ</sup>草<sup>やま</sup>山に登って、すっかり瀬が枯れ、  
蛇<sup>へび</sup>の<sup>ぬ</sup>抜け<sup>がら</sup>殻のように白くうねる瀬<sup>せ</sup>戸<sup>と</sup>川<sup>がわ</sup>を眺<sup>なが</sup>めて、深  
いため息をついた。そして、雨<sup>あま</sup>雲<sup>ぐも</sup>はないものかと西  
の空に目を凝<sup>こ</sup>らして、手を合わせて拝<sup>こ</sup>んだ。

「なんまいだぶつ。なんまいだぶつ。」

雨<sup>あま</sup>乞<sup>ご</sup>いの祈りを終えたじいさまが、

深いため息をひとつして

「雨を降らせてくれりゃあ、わしん持ってるものな  
ら、何でもくれてやるのになあ。」

と、つぶやいた。

「そりゃあ、ほんとうかやあ」

と後ろから声がした。気づくと、じいさまの後ろに  
ひょろりとした若者が立っていた。

まばたきもせず、じっとじいさまを見て、

「今夜、雨を降らせてやるに。田植えが終わったら、  
お前の大事なまご娘をもらいに行くでなあ」

と言うと、するりっと消えてしまった。



その夜、茅葺きの屋根にしとしと、しとしとと降り出した雨音を聞きながら、じいさまは明日こそは、まご娘と一緒に田植えができるとよろこんだ。ようやく芽吹いた大切な早苗を、枯らさずに済むことがうれしかった。毎日、幾回も幾回も裏山の泉から水を汲んで、家の前の苗代に注いでくれたのは、か細い体のまご娘だったのだ。

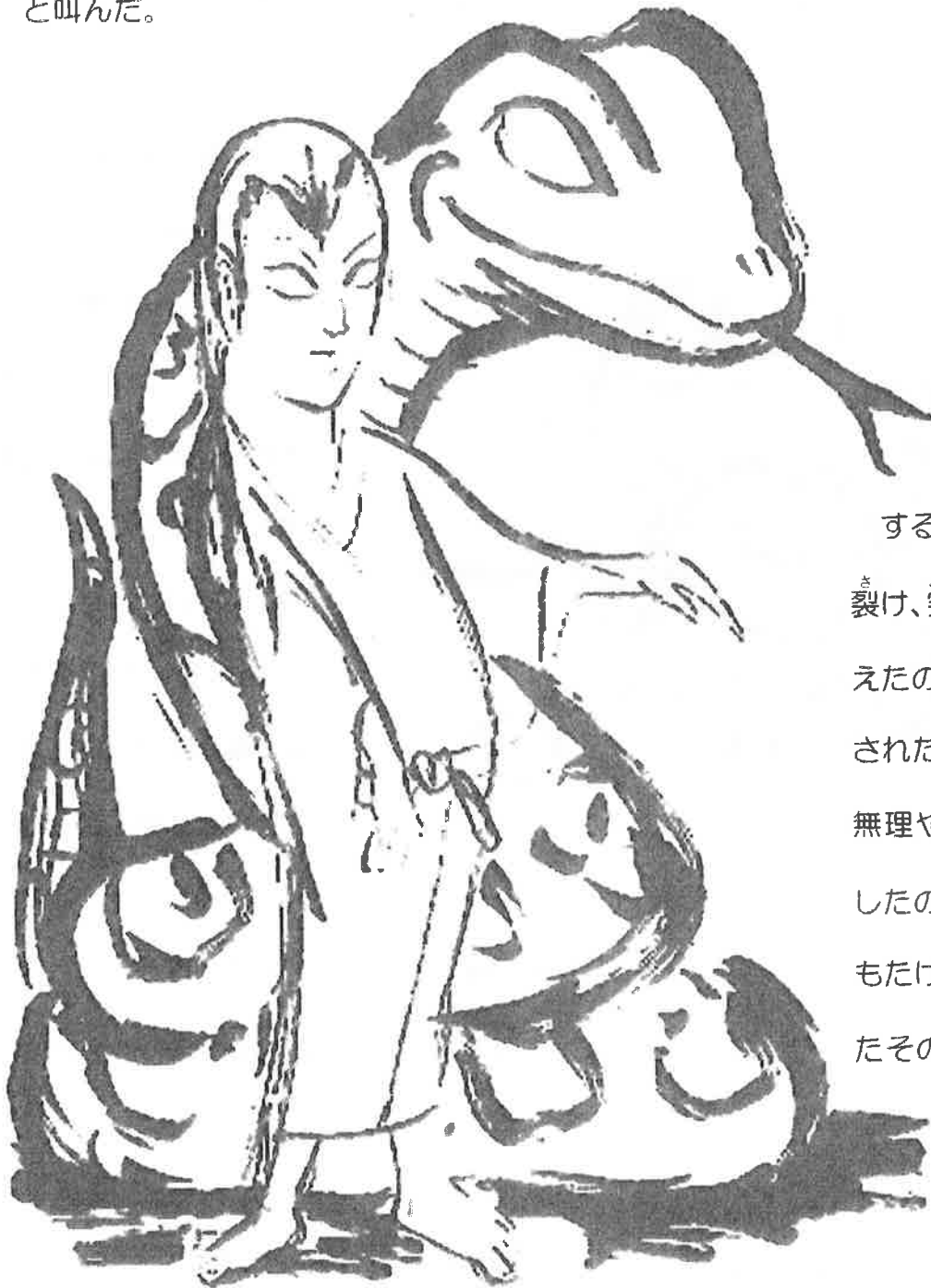
その様子を見ていたのはじいさまばかりではなかった。娘が釜やお櫃を洗う度に、おいしい米粒をもらっていた焼津ガニも、やさしい娘の喜ぶ姿を楽しみにしていたんだ。



夜通し降った雨のおかげで、瀬戸川も田んぼもたっぷりと恵みの水をたたえていた。一面に鋤き込まれた田んぼは、朝日を浴びてきらきら輝いていた。じいさまと娘は並んで腰をかがめ、柔らかい土に一本づつ、心を込めて苗を植えていった。

最後の苗を植え終わると、不思議なことに今まで鳴いていたカエル達の声がぴたりと止んだ。そして、あおくさい匂いが漂いはじめた。いつの間にか畦にきのうの若者が現れ、「約束通り、娘をもらいにきたでなあ」と言った。若者は音もなく近づいて、驚いている娘の腕をとると、その手は又ルリと冷たい。驚いた娘は若者の手を振り払い、じいさまの陰に隠れた。

じいさまはくわを振り上げて、  
「そんな約束なんかしていますか。大事な  
まご娘だで素性もわからんおみやあな  
んかにやらにゃあよ。」  
と叫んだ。



すると、若者の口が大きく  
裂け、突如大きな蛇に姿を変  
えたのだ。そして、振り下ろ  
されたくわをかいくぐって、  
無理やり娘をつれ去ろうと  
したのだ。ぬらぬらと鎌首を  
もたげ、娘に巻き付こうとし  
たその時……。

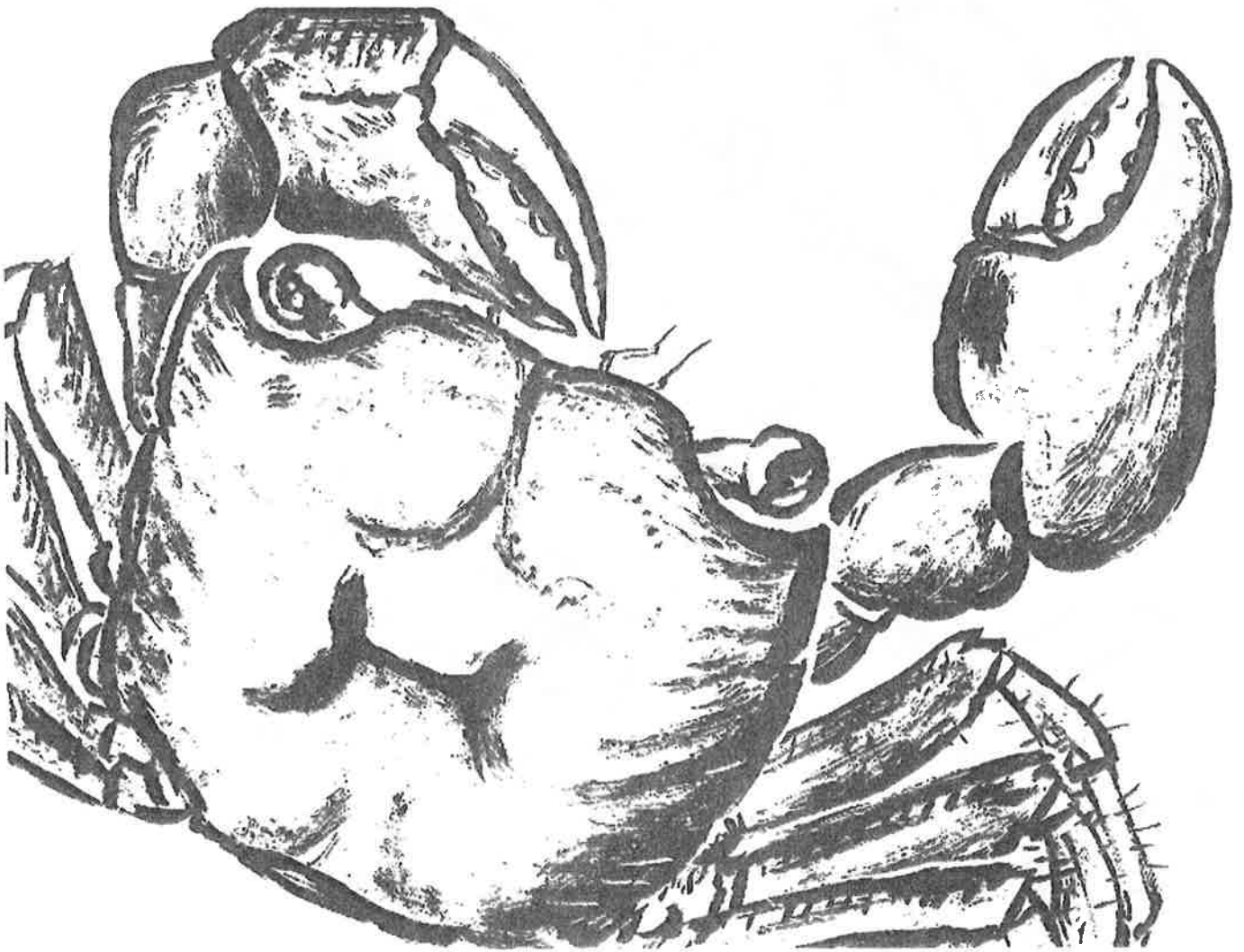


づわづわ、ぶくぶく、  
づわづわ、ぶくぶく、という音が  
地を這って聞こえてきたのだ。

何百何千という焼津ガニがあちらから、こちらから  
押し寄せて、大蛇を取り巻いてしまった。

そして、赤いはさみを振りながら大蛇に襲いかかったのだ。  
目を刺し、うろこを剥ぎ、のたうちまわる大蛇にづわづわ、づわづわと  
山のようにのしかかった。大蛇は痛さのあまり暴れて、焼津ガニの何匹か  
かみくだいたが、たくさんのカニにやがてきれいさっぱり食べられてしまった。

おびえてじいさまにすがっていた娘がようやく気を取り直した頃には、カニ達は何事もなかったようにづわづわ、ぶくぶく、づわづわ、ぶくぶくといいながら散って行った。



焼津ガニが娘を助けに来たのは、いつもおいしい米粒を食べさせてもらったお礼だったと言われている。でもきっと、それだけじゃないよ。<sup>おくびょうもの</sup>臆病者と笑われていた焼津ガニは、たくさんの仲間と小さな<sup>めいよ</sup>勇気を持ち寄って、<sup>ぼんかい</sup>名誉を挽回したのさ。きっとね。

チョキン、おしまい。